

岩屋古墳第3次 現地説明会資料

平成25年10月19日(土)

栄町教育委員会

公益財団法人 印旛郡市文化財センター

岩屋古墳の第3次調査は、墳丘の南側に2つ開口している石室のうちの、西石室の石室内清掃及び前庭部の構造を知ること、東石室天井部の構造を確認すること、平成20年度に行われた測量調査で存在が明らかになった舌状張出し地形の構造を知ること、平成24年度調査で明らかになった2重周溝の状況をより明確すること等の目的で、9月19日より調査が行われています。

西石室は長さ4.8m、幅1.7m、高さ約2.5mの単室構造で、石室の奥にある棺台や天井の一部に片岩の板石が使われている以外は、貝化石の切石で石室がつくられていることが知られています。昭和45年に明治大学によって測量調査が行われ、石室の詳細な実測図が作られました。今回はその実測図中でも空白部分になっている、石室入口付近の積もっていた土を取り除き、床面を出す作業を行いました。その結果、入口付近から軟質砂岩の切石の床が見つかり、西石室は3種類の石で構築されていることが明らかになりました。

また西石室前庭部の両脇で、積み上げた土をローム土や粘土で覆っている状況が確認できました。積み重ねた土の流失を防ぐのと、墳丘裾部の見た目を整えて見せるためと考えられます。

東石室の調査では、墳丘から東石室の天井に向かって掘り下げを行い、貝化石の切石の裏込め部分に白色粘土が使われていました。

舌状張出し地形とは、古墳の南側にみられる突出した部分のことで、やや東に曲がりながら低地に降りています。石室正面に存在する不自然な地形のため、石材の運搬路であるとか、古墳に向かう参道の役割をしていたのではと考えられてきました。南北に長い調査区を設定して掘り下げた所、張出し地形自体は深さ40cm程で、地山であるローム層や粘土層に達していました。また所々に人為的に掘削された場所があり、舌状張り出し地形が自然地形を整形・改変して構築されていることが分かりました。

墳丘南側の東西に設定した調査区からは、東西両方で内側周溝の角が見つかり、内側周溝の形が見えてきました。また台地縁辺部では、舌状張り出し地形と同様に、人為的な改変が行われていました。

今回の調査では、西石室の石材に軟質砂岩が使われていることや、東石室の裏込め部分に白色粘土が使われていること、内側周溝の形状等、古墳自体に新たな発見があったとともに、古墳の周囲についても、岩屋古墳に伴うと見られる人為的な改変が行われていることが明らかになりました。